

「多様性と一致」

聖書の箇所：Iコリント 12：1～13

<導 入>

私たちは、先週九週間ぶりにこの所で礼拝を持ちました。やはり顔と顔とを合わせて会うのは、祝福であると感じました。教会は、コロナウイルス感染の波をまともに受けています。礼拝は、ほとんどがオンライン礼拝となり、いろいろな活動は自粛せざるを得なくなりました。コロナウイルスの感染を防ぐために、とにかく「集まらない」ことが求められます。私のクリスチャンの友人は、もう一年半以上も教会に行っていないと言っていました。もちろん、ネットを通して礼拝は守っていますが、教会生活はできていませんとのこと。このようになると、教会の存在意義はどこにあるのだろうかと考えてしまいます。いろいろな方法を通して教会のメンバーとつながることができそうですが、兄弟姉妹が「一つになる」という醍醐味を味わうのは困難です。イエスは、十字架の道を進まれる前に弟子たちのために祈られました。その中で、「あなたがわたしのうちにおられ、わたしがあなたのうちにいるように、すべての人を一つにしてください」（ヨハネ17：21）と祈られました。

先週、第二次世界大戦の時の「アウシュビッツ強制収容所」の“ゾンダー・コマンド”と呼ばれる人々のこととお話しました。ゾンダー・コマンドと呼ばれる人々は14か国のユダヤ人からなり、自分の民族ユダヤ人の撲滅の働きの一端を担わされていました。同じユダヤ人と言っても、ヨーロッパの東部と西部とでは、言葉も違い、文化も違って、互いを理解することは困難でした。ナチスは、人間は違いを受け入れることは難しいことを知り、それを利用して、彼らが一つになってナチスに歯向かうのを阻止していました。違いを乗り越えることは、中々難しいことです。しかし違いを乗り越えなければ、一つになることはできません。自分とまったく同じ人は、この地上にいません。性格、考え方や物の見方、感じ方、宗教や思想は、みんな違って、夫夫婦であっても、違います。教会の中にも、違いがあります。

コリントの教会では、賜物の違いによって教会の中で混乱が見られました。そこで、パウロはコリントの教会に手紙を送り、どうしたら教会が一致できるかを伝えました。教会では違いを受け入れながら、一つになることができると説きました。カルト化した教会では、指導者の命令に従うことによって、画一的に一致することは可能です。しかし、それは神様が各人を個性の違いをもって創造されたという人間の存在目的に反します。また多様性を肯定しながら、その違いを受け入れなければ、一つになることはできません。これらのことは、時代が変わっても同じことが起こっています。パウロは、教会では「多様性のある一致」を実現できると、コリントの教会に書き送りました。

I. 教会は、キリストのからだ

▽Iコリント12：12、13 パウロは、教会のあり方を「からだ」という私たちがよく理解できることを用いて語ります。12節「からだの部分が多くても、一つのからだ」とあります。私たちのからだには、多くの器官がありますが、一つのからだです。これこそ「多様性のある一致」です。教会が私たちのからだのようであれば、多様性を尊重しながら一つの教会として成り立ちます。12節「キリストもそれと同様です」とあります。つまり、「教会はキリストのからだである」ということです（コロサイ1：24）。では、このことはどういう意味なのでしょう。第一に、キリストこそが教会のかしらです。教会は、イ

エスが働かれる場です。生けるキリストは教会を通して働かれます。ですから、教会に来ることによって、私たちはイエスに出会うことができます。私たちが礼拝に集うのは、イエスに出会うためです。もちろん、個人的にイエスに日々会うことができますが、教会ではそれとは違う祝福を受けることができます。第二の意味は、クリスチャン一人ひとりが、キリストの内にある者とされています。私たちは、イエスを信じ、イエスに結びついているという信仰によって、キリストのからだです。教会は、この世の組織のようにお金を儲けるとか、何かの事業をするために、集まっているわけではありません。私たちはイエスを信じ、イエスに結びついているので集まっています。私たちは個人的にイエスに結びついています、それだけではありません。教会の働きを通して、私たちの信仰は守られ、強められ、育まれます。第三は、私たちは互いに「キリストのからだの一部である」ということです。私たちは、教会を成り立たせている一員というだけではありません。キリストのからだの一部です。口がなければ話せず、また食べられません。普通、足がなければ歩くことができません。私たちは、一人ひとりがかけがえのない存在です。代わりが利かない一人ひとりです。この教会に対する真理は、このコロナの時代にあっても、不変です。集まることができなくても、私たち一人ひとりは、教会にとってかけがえのない存在であることには変わりありません。▽教会はキリストのからだですが、どうしてそのようになったのでしょうか。Iコリント 12：13 私たちが教会のからだの一部となったのは、「一つの御霊から飲んだ」からです。Iコリント 12：3 聖霊は、「イエスを主です」という告白に導かれます。この告白は、初代教会の信仰告白の言葉です。十字架にかかって死なれ、復活されたイエスが真の神であり、真の救い主ですという告白です。この告白は、知識や才能、努力によってもたらされるのではなく、聖霊の働きです。今私たちがイエスを信じて、クリスチャンとして生きていること自体が、聖霊の働きのあかしです。私たちは、すでに聖霊の働きを体験しています。私たちが信仰生活をしている中で、はたして自分には信仰があるのだろうかと思うこともあるかもしれません。熱心な祈りもできず、神様のために何もできていないと思うかもしれません。また人との関係がうまく築けないと思ったり、罪や弱さをどうしても克服できないと悩むことがあるかもしれません。しかし、イエスを救い主として信じ、イエスに従おうと願っているならば、聖霊の働きを体験しているのです。自分の状況を嘆いたり、劣等感を持つ必要はありません。13節では、「私たちはみな、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も」とあります。このような民族的な違いや社会的違いを乗り越えて、聖霊によってイエスを告白するならば、キリストのからだの一部です。当時ユダヤ人とギリシャ人が一つになることは考えられないことでした。さらに奴隷と自由人とはまったく正反対の立場でした。当時は、民族や文化、身分によって厚い壁がありました。しかし、そのような壁を、キリストは取り除かれました。教会の中では、どのような差別も克服されます。先日、東京パラリンピックを目指している選手のことが取り上げられていました。アルビノという色素が先天的に作れず、髪も全身も白い皮膚の状態の人です。彼らは、差別や偏見に苦しみ、東アフリカのマラウイでは数千人の人たちが殺害されています。「彼らの骨や身体の一部を呪術師に渡して、煮て食べれば、富をもたらす。彼らの泣き叫ぶ声が大いほど、切断部分に宿る力は強力になる」という迷信が、彼らを危険にさらしています。このような差別や偏見は、全世界で今もありますが、聖霊に導かれれば、これらの違いを乗り越えることができます。当時の教会ではユダヤ人とギリシャ人が、そして奴隷と自由人が一つとなって、共同体を形成されていました。「多様性のある一致」こそ、キリストのからだである教会のしるしと言えるでしょう。私たちの人生の過去の歩みがどのようなであれ、今聖霊によってイエスを信じているならば、キリストのからだである教会の一部です。教会はイエスを信じる思いをもってすべての人に門戸が開かれています。一つの御霊によって、つまり神様によって違いを乗り越えることができます。ここに「違いを乗り越えた一致」があります。

II. 賜物の多様性

▽Iコリント12:4~6 4節の「賜物」とは「カリスマ」と言われ、聖霊を通して与えられる能力です。この聖霊の賜物は、「いろいろ」あります。5節の「奉仕」は、神様のために行う働き、例えば司会とか、奏楽とかです。これも「いろいろ」あります。6節「働き」は、神様のためになされる働きであり、伝道や訪問や、助け合いなどで、これも「いろいろ」あります。教会の働きは多様性に富んでいます。それが、教会の豊かさを生み出しています。私たち一人ひとりにも、賜物が与えられています。何かをする働きもあれば、集会に集う働きもあります。神様の御前では本質的な違いはありません。問題は、賜物の違い、多様性が教会の混乱の原因となっていたことです。当時のコリントの教会で、混乱が生まれていました。異言こそが最大の賜物であり、それを誇る人たちがいました。そして、礼拝の秩序が乱されていました。教会の礼拝のさなかに、誰かが恍惚状態に陥り、何語ともわからない言葉で話します。それは、誰もが望んでいる賜物でした。それは、聖霊の直接的な影響によるものと考えられていたからです。しかし、会衆にはまったく理解できないことでした。パウロは、恍惚状態や狂信に陥ることに危険を感じていました。ましてやそのことによって礼拝の秩序が乱されてはならないと考えていました。そこで、特別の賜物についてコリントの教会の人たちに語りました。Iコリント12:8~10 このところで、九つの賜物について取り上げています。「知恵のことば」「知識のことば」「信仰」「いやし」「奇跡を行う力」「預言」「霊を見分ける力」「種々の異言」「異言を解き明かす力」です。ここには、賜物の多様性が示されています。これらの賜物は、目立つものもあれば、そうでないものもあります。現代においても、「いやし」や「異言」の賜物に特に注目が集まることがありました。いわゆる「ペンテコステ派」と呼ばれる人々は、これらを熱心に求めました。これらの現象は、聖霊の働きのしるしであると考えられていました。私たちは、これらの賜物の現われをどのように受けとめればよいのでしょうか。現代のプロテスタントの教会において、「これらのしるしは、聖書が完結していない過渡期に起こった特殊な現象であって、当時と同じ意味をもつ「いやし」や「異言」は存在しないと考える」人々もおられます。反対に、私も体験したのですが、礼拝を高揚されるために、賛美とともに異言が語られる教会もあります。ここで、私たちは、聖書に立ち返る必要があります。聖書の言葉は神様の言葉ですから、時代によって異なることはありません。聖書に「いやしの賜物」とか「異言の賜物」とありますから、これらの賜物を否定することはできません。そして、このようなことが起こることは聖書に基づく神様のみわざです。もちろん現代でも、起こりうることです。

▽Iコリント12:11 ここに大事な神様の原則が示されています。これらの賜物は、御霊が与えてくださる「賜物」であるということです。クリスチャンにも、説教の賜物、賛美の賜物、援助する賜物、管理の賜物と同じように、異言もその人に与えられる賜物の一つです。異言の賜物を受けている人もいれば、そうでない人も同じクリスチャンです。ましてや、異言が聖霊の満たしのしるしであることは、聖書のどこにも書かれていません。賜物は、「御霊が、みこころのままに、一人ひとりそれぞれに分け与えてくださるのです」とあるように、賜物が与えられるのは、御霊の働きです。神様がみこころのままに与えられます。それは、人の力とか努力ではなく、神様の恵みです。「いやし」も「異言」も、神様の恵みです。いやされなかったとか、異言が与えられなかったから、自分には信仰がないと責める必要はありません。Iコリント12:7 賜物が与えられるのは、「皆の益」のためです。自分の信仰を鼓舞したり、自己満足や自己実現のためではありません。ただ他者の益のために与えられています。「皆の益」と言えば、個人が全体の中に埋没してしまうことではありません。一人ひとりに与えられた異なった賜物が生かされることによって、教会が建て上げられるのです。大切なのは、自我や肉の思いで、神様から与えられた賜物を用いるのではなく、聖霊に導かれてそれを用いることです。ここにおいて、「多様性のある一致」が実現します。